NEWS Kio FD+

2014年5月号

発行日　2014年5月20日

編集部　教育推進室

学生の主体的学びを引き出す教授と学習

巻 頭 言

教育学部長・教育推進室長　　白石　裕

昨2013年度のFD研修会は一昨年度に引続き本学教員の授業に学ぼうということになり、金子章道、粕井みづほ両教授の授業のビデオ観察と石川裕之准教授による分析の結果を受けて、当日の参加者による質疑応答という形で進められました。授業の内容については石川准教授の報告にあるとおり、非常に示唆に富むものでした。授業の内容・展開はもとより事前・事後の入念な取り組みがいかに大切か、そしてまた、本学のこうした優れた授業実践を共有し、継承・発展させていくことがいかに大事かをあらためて認識しました。一定期間のFD研修会での成果をまとめ、後の世代につなげることができればと願っております。

ところで、両教授の授業からも推察されたように、現在、FDに求められているのは、学生に授業をよく理解させるだけではなく、学生の意欲をかきたて、主体的な学びを引き出していく方策やスキルです。一昔前の大学であれば、そうしたことは学生個人の責任だとして突き放していましたが、高等教育が大衆化し、勉学意欲が必ずしも十分ではない学生も受け入れる現代の大学ではそうはいきません。

そこで学生にいかに授業を理解させ、意欲をかきたて、主体的な学びを引き出すかということになりますが、それについて私は発達心理学者のブルーナー(Bruner, J.S.)のいう教科の構造化、発見学習の考え方が参考になるのではないかと思っています。教科の構造化とは各学問分野の基本的概念・原理・法則の修得を中心として教科内容を構成することであり（それによって学習の転移を可能とする）、発見学習とは学習の過程で生徒（ブルーナーはハイスクールの生徒を念頭に置いています）が直観、想像を働かせながら規則性・法則性の発見の過程に参加することです。ブルーナーの理論はすでに半世紀前の理論であり、またアメリカでの実践も限られたものでしたが、教授と学習を統一し、現代の学生の学びの課題解決に向けてヒントを与えてくれるものではないかと思っています。

本学の優れた授業実践はやはり各教員のこれまでの経験から得られた知見、知の体系に裏づけられたものでしょう。次回のFD研修会ではそうしたこともぜひ学びたいことの１つです。

＜C O N T E N T S＞

特 集　2013年度FD研修会　授業改善を進めるためにⅡ　―授業をとりまくもの―

石川裕之先生の授業分析報告・・・・・・・・・・2

研究授業レポート

「発達系理学療法学Ⅱ」　理学療法学科　今北英高（2013.11.19）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
「保健行動学」　看護医療学科　乾富士男（2013.12.24）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
「基礎栄養学Ⅱ」　健康栄養学科　松村羊子（2013.10.17）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
「現代の家族関係」　人間環境デザイン学科　齋藤功子（2013.11.7）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
「学校看護Ⅲ」　現代教育学科　古川恵美（2014.1.14）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

特　集

2013 年度　FD 研修会報告

「授業改善を進めるためにⅡ－授業をとりまくもの－」

報告：石川　裕之

2013 年 12 月 5 日（木）に本学で開催された教育推進室主催「2013 年度　FD 研修会」について報告します。

研修会では昨年度に引き続き本学でおこなわれている授業の分析に取り組み、その成果を参加者全体で共有しました。今年度は金子章道先生（健康科学部長）と粕井みづほ先生（現代教育学科）にご協力いただき、「授業改善を進めるためにⅡ－授業をとりまくもの－」というタイトルで私、石川裕之（現代教育学科）が報告をおこないました。

授業分析の対象と方法

今回分析の対象とさせていただいたのは以下の２つの授業です。

・金子章道先生
　授業科目：「生理学Ⅱ」（1P 対象）
　当日の授業テーマ：「末梢神経の変性と再生」（10 月 23 日）

・粕井みづほ先生
　授業科目：「家族心理学」（3E 対象）
　当日の授業テーマ：「家族とは何か－3－家族の解体と絆の弱化」（10 月 28 日）

授業分析の方法はおおむね昨年度を踏襲し、①授業を教室の前と後ろからビデオカメラで撮影、②授業者の先生へのインタビュー、③授業リフレクションシート（学生用）の配布・回収（昨年度は受講者に直接インタビュー）、という 3 つの手順でおこないました。

当日の研修会は昨年同様、①報告の中で適宜両先生の授業のビデオを参加者に視聴してもらう、②その後に参加者同士が小グループに分かれて授業の特徴について話し合う、③グループ内で出た意見を代表者に発表してもらい会場全体で共有する、という形式で進められました。

金子章道先生の授業

まず金子先生の授業「生理学Ⅱ」の大きな特徴として参加者から指摘が出たのが、頻繁に学生に質問をされている点でした。学生のリフレクションシートでも「こんなに質問の多い授業は他にはないと思う」という意見が出るほどです。金子先生が学生に質問される際には大きく分けて、①授業内容に関連する前提知識の確認・復習、②人体のはたらきに関する「なぜ？」を問う、の２つのパターンがみられました。①の質問をテンポよく繰り出して授業を進めていき、重要な点では②の質問で学生自身にじっくり考えさせている様子でした。さらに、教室内を歩き回って様々な位置の席の学生を当てており、学生がすぐに答えられない場合もすぐに次の学生にいかず、ヒントを出すなどしてしばらく留まっている光景がしばしばみられました。こうした「溜め」の時間は、質問を受けた学生に考える・思い出すための猶予を与えると同時に、他の学生が隣近所で話し合う時間が生まれるという効果も生み出していました。学生のリフレクションシートにも、授業内容や質問の中に PT として必須の知識が多く盛り込まれていて復習にもなるという意見や、単に知識がつくだけでなく「なぜ？」を問われるので理解が深まるといった意見が多くみられました。

その他にも金子先生の授業には数多くの工夫がなされていました。教科書を辞典的に活用させている点や、授業で使ったスライドを授業終了後に CEAS にアップされている点などは他の先生方にも参考になりそうです。また、7 回の授業ごと（第 7、15、22 回目）にテストを実施されているのはユニークですし、ただテストをするだけでなく、テストの返却時に解説をされ、その上で分からない点については学生ごとの個別対応で教えられているとのことでした。

先生は、高校での物理・化学の学びが不十分であった学生を対象とした「PT のためのベーシックサイエンス」も担当されており、「生理学Ⅰ」「生理学Ⅱ」の復習も含めて

対応されているそうです。当該授業の時間内だけでなく、授業時間外や他の授業においても、学生の理解を助け、深めるための仕掛けがなされていることが分かりました。

粕井みづほ先生の授業

粕井先生の授業「家族心理学」の特徴として参加者から指摘が出たのも、やはり学生に対する質問の多さについてでした。授業の形式としては板書を使った伝統的な講義形式といえますが、その中で学生に対して多くの質問が投げかけているのが印象的でした。特に、「なんでやろ？」「絆とは？」といった学生自身に考えさせる質問が多い点が特徴といえます。学生のリフレクションシートにも「学生の意見を聞いたり、考えさせたりする時間を設け、学生が自ら学習へと進んでいける授業だと思う」といった意見がみられました。

また、毎回授業の最後にミニッツペーパーを書かせ、次の回の冒頭にスライド（PPT）を使って学生の意見の紹介とそれに対する回答、および前回の振り返りをなさっている点もユニークでした。この取り組みは特に復習と導入に効果的なようで、学生のリフレクションシートにも「授業の冒頭で前回の学生の感想を紹介してくれるので復習になるし、すんなり授業に入れる」といった意見がみられました。

その他にも粕井先生の授業には、本題に入る前にその回の授業の見通しを話す、教科書を予習・復習用に活用させ、授業では教科書の内容をさらに具体的かつ丁寧に教えていく、全15回を4つのテーマに分けて1～2つのテーマが終わるごとに1,000字程度のレポートを書かせるなど、学生の知識の定着と理解の深化を図るための数多くの工夫が盛り込まれていました。

授業改善を進めるための示唆点と課題

両先生の授業を拝見してまず感じたことは、授業は授業時間内だけで成り立っているものではないという、当たり前であるが日頃忘れてしまいがちな事柄でした。実際の授業時間外にも、授業内容の選択・組み立て、授業方法や評価方法に関する様々な仕掛け・工夫、学生のサポート・フォローなどがおこなわれており、こうしたことも質の高い授業を支えている重要な要素であることを再認識しました。

また、質問やミニッツペーパーなどを活用した学生との双方向的なコミュニケーションが授業を構成する上での重要な要素となっていたり、学生の自習や予習・復習を促すような仕掛けが数多く取り入れられている両先生の授業を拝見し、教員だけでなく学生もまた授業を作っている1つの主体なのだということを再認識しました。

教員による日常的な授業改善の努力はもちろんですが、学生が主体的に授業（課外学習等を含む）に参加することもやはり授業の質向上にとって不可欠な要素ではないかと思います。授業の質向上による最大の利益享受者は学生自身です。学生が主体的な学習者としての「かまえ」や習慣を身につけ、その結果授業の質がさらに向上し、学生がより多くの利益を受けるという好循環を作り出していくために大学やわれわれ教職員は何ができるのか。このことを全学的に議論し、考えていくことが、今後の本学のFDの課題ではないかと思いました。（文責：石川）

研究授業レポート

「発達系理学療法学Ⅱ」

理学療法学科　　今北　英高

『発達系理学療法学Ⅱ』は、理学療法学科2回生が対象で後期に開講されています。今年度は66名の学生が受講しており、子ども、いわゆる発達障害児についてどうのように理学療法の評価を実施するのか、どのようにプログラムを立案するのかという専門的視点が養われるよう、講義をしております。2回生は、理学療法専門科目の学び始めの学年になります。ですので、出来るだけ自分たちが目指す『理学療法』というもののイメージを持ってもらうために、当科目でも写真や動画を駆使し、障害を持つ子どもの姿勢や動作、評価法について詳しく学習していきます。

全体的な流れとして、16回の授業のうち、前半は正常および障害をもつ子どもの成長・発達過程の基礎知識を、中盤からは各論として、脳性麻痺や筋ジストロフィー症、二

分脊椎や整形外科疾患などについてその病態と理学療法士の関わり方について学んでいきます。毎年、各疾患について新しい知見が出されるとアップデートしながら構築し、より最新の知見と今までの基本的な考えを融合しながら、学生に伝えています。

また、授業内容もさることながら、授業方法についても毎年毎年、試行錯誤を重ね、現在に至っております。私にとっては授業方法について悩むことが多く、『どうすれば、理解力が深まるのか』、『どうすれば、もっと興味を抱いてくれるのか』、『どうすれば、もっとスムーズに授業を展開できるのか』、など、多くの壁にぶち当たりながら、毎年、マイナーチェンジを繰り返しています。就任当初は『出来るだけ板書し、書くことでしっかりと覚えてもらおう』とノートにしっかり書くという授業を実施しました。学生にとっては確かに記憶に残りやすいようであったみたいですが、時間がかかり過ぎて、予定した内容を教えるには不十分であり、次年度に『パワーポイントでまとめ上げ、スムーズに授業を展開する』ことを心掛けますと、学生からはスピードが早すぎるからついていけないといわれ、そのまた次年度には『配布資料に空欄を付けて、そこに書き込む形にする』と、今度は学生から書き込む場所がわからないと。色々と試行錯誤を繰り返し、現在では『授業スライドに書き込む場所を色分けして、学生にも理解できる』ような形式に変更し、授業スピードも保て、学生もメモを取り理解する、という形に近づいているように思います。

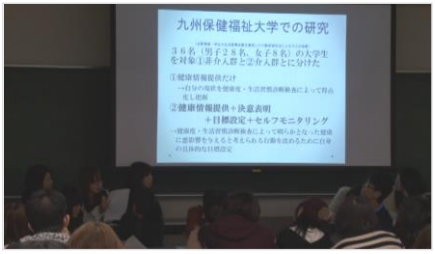
しかし、その反面、このような講義型の授業で良いのか？という疑問も出てきております。理学療法学科では、１回生時に一般教養や基礎医学を学び、2 回生から主に理学療法専門科目が履修されます。2 回生の時点では、幅が広く、また深い専門知識の修得を目的とした講義型でよいのかもしれませんが、「学士力」や「アクティブラーニング」などが言われるなか、本学科学生も理学療法士の卵として、思考し、自分の意見を発言し、学んだ知識を将来の理学療法に結び付けられる力を付けてもらえるよう、今後も授業内容と授業方法について、より良い授業を提供できるように努力していきたいと思います。

「保健行動学」

看護医療学科　　乾　富士男

保健行動学は健康とは何かを理解することを目的としています。しかし、心身機能に関する理解が十分に進んでいない１年生を対象とした科目です。したがって、保健行動や行動変容に関する理論の紹介をしつつも、身近なところで健康とは何かを考えられるような内容にしています。

受講生は最終的にはそれぞれの身近なところで行動変容に取り組む課題に挑戦します。それまでの行動変容理論の理解の一環として、今回の講義ではディベートによって対立する価値観をそれぞれに理解し実際の行動変容への応用を考えられることを期待していました。ディベートについては、意味や方法などの前提となる知識が学生には不足しているようでしたので、事前にディベートの方法などを講義しました（1 コマ）。また、十分な議論のために事前の調査の時間を確保しました（2 コマ）。



今回ディベートを取り入れてみて、よかったことと工夫が必要と感じたことをまとめます。よかったことは、調べ物をして発表するということでは表面的な理解にとどまることが多い部分も、ディベートという形では多面的にとらえることができたのではないかと感じました。行動変容理論は正解が一つあるということではなく、ケースバイケースで考えなければならないものです。しかし、初学者は一つの理論を知るとすべてのケースをその理論で捉えようとして理論に振り回されるということがあるかと思います。ディベートを通して正反対の可能性を議論することで単純な理解を防ぎ、実践的な理解につながったのではないかと思います。逆にディベートによる教育の難しさを感じたことは、そもそもディベートの意味が理解できない学生が多かったことです。ツールとしてディベートを用いようとしても、論理的な思考が難しかったり、ディベートの方法が理解できなかったり、表現能力が弱かったりと、前提となる能力が不足していることが目立ちました。

また、100 名近くのクラスでしたので階層的に役割分担をして何らかの関わりを持たせたのですが、主体的に参加できない学生もいました。

今回ディベートを講義に取り入れてみて、ディベートの有用性と面白さを実感しつつも、多人数のクラスでの運用の難しさを感じました。この科目はこれで終了ですが、今後も機会があれば教育ディベートを行っていきたいと考えています。

「基礎栄養学Ⅱ」

健康栄養学科　　松村　羊子

「基礎栄養学Ⅱ」は「基礎栄養学Ⅰ」と合わせて通年で栄養学の基礎を学びます。管理栄養士を目指す健康栄養学科の学生にとっては生化学や解剖生理学などの専門基礎科目を学んだうえの専門科目で、2回生の1年間をかけて学びます。

栄養とは、栄養素などを含む食物を口から人体に取り込んで、種々の生命活動を行うことであり、ヒトは身体をつくる栄養素や身体を動かすエネルギーは基本的にはすべて食べ物から摂っています。そのため栄養学では、食事として摂取した栄養素がどのように体内で変化しどのように利用されるかを学びます。理解するためには、栄養素の構造だけでなく身体の構造も理解しておくことが必要です。そのイメージをもってもらうために、栄養素がどのように形を変えていくのかを大きな分子モデルを用いて説明しています。さらに口から摂取した栄養素が体内でどのような道筋を通って消化吸収され、また吸収されなかった栄養素が排泄されるかを人体模型や消化器系モデルを見てもらうことで、2次元ではなく3次元で理解できるように努めています。
さらに、教科書の図表をパワーポイントにして見せることで共有し、重要なポイントを明確にするようにしています。

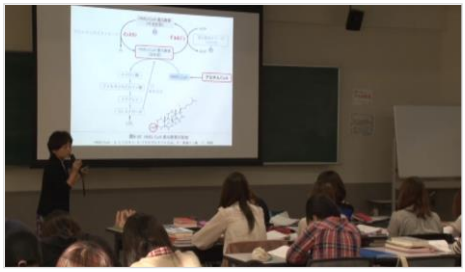
今回の授業は、栄養素の代謝に関しての部分でした。栄養素の代謝に関しては生化学でも学ぶことですが、栄養学では身体全体で同時にいろんな栄養素が代謝されていることを理解できるようになることが大切です。重要な反応がたくさん出てきます。そのために、特に重要なことは質問を繰り返すことによって「刷りこむ」ように心がけています。しかしながら今回VTRで自分の授業を見る機会を得て、自分がかなり早口で話していることがわかり、授業アンケートにおいて指摘された部分を改めて実感することができました。また学生に投げかけた質問も、話しの流れに沿っていないところもあり、繰り出すタイミングの重要性にも気づかされました。自分の授業が学生にどのように響いているのか、自分で思っていた以上に学生に伝えられていないのではないかと今後の改善を目指すきっかけをいただきました。

まだまだ試行錯誤は続くと思いますが、学生には栄養学の「刷りこみ」を続けながら、自分は刷りこまれずに新しい気づきを大切にしていきたいと思っております。

「現代の家族関係」

人間環境デザイン学科　　齋藤　功子

住宅は家族の有り様を反映します。研究授業として取り上げた「現代の家族関係」は、家族の有り様を学ぶ授業です。実際には、文章力のない学生や図表等のデータを読み取る力の乏しい学生が多いことから、そうした面を学ぶための授業と考えています。そのために、毎回、テーマに即したデータをプリントし、当日レポートを課しています。



当日レポートは、先ず、プリントを見て自分でデータを読み取り講義前レポートを書きます。その後、講義を受け、最終レポートを書き提出してもらいます。次週までに添削し、A，B，Cの評価をして返却しています。半期15回の授業だけで文章力の劇的な向上が期待できるわけでもありませんが、しかし、当初に比べると確実に向上の見られる学生は多くいます。何より、A，B，Cの評価に一喜一憂しAの評価がつくと素直に喜び、次もAを取るぞと励みになっているようです。添削は、受講生数によってその労力が異なりますが、今年は55人が受けており、あまり丁寧には添削することができていません。それを補うために、模範解答となるレポートを選び、次週にプリントして配布しています。

この日の授業は「未婚化・晩婚化の理由について考察しなさい」というテーマです。これまでに、戦後日本の出生率の変動について取り上げ、現在の少子化の原因が未婚化、

晩婚化にあることを学んできました。未婚化・晩婚化は、若者が結婚する意思を持っていないというわけではなく「適当な相手と会えば結婚する」意志を持っていること、近代化に伴い「一番大切なものは家族」と考えている人は多くなっていること、そして若者の収入格差が確実に広がっていることなどを理解してもらいました。自分たちの身近な将来に関連することでもあるので、元気すぎて授業中うるさいと指摘されることの多いデザインの学生たちにしては、静かに集中して授業に取り組んでくれているように思われます。

ただ、専門でもない自分がこのような科目を担当していていいのかという思いは持っております。毎回、授業準備には時間がかかります。だからといってよい授業が出来ているわけではありません。授業研究会の折に欠点等をご指摘いただいて勉強させていただこうと考えております。

最後にお忙しい中、研究授業にご出席いただきました先生方に御礼申し上げます。

「学校看護Ⅲ」

現代教育学科　　古川　恵美

「学校看護Ⅲ」は２回生の養護教諭資格の必修科目です。この科目では、保健室執務を具体的に想定したうえで、日常遭遇することの多い児童生徒等の健康問題を取り上げ、学校看護援助技術を学びます。児童生徒等のライフステージに応じた援助ができるよう、また疾病や障がいのある児童生徒等を理解する方法や支援方法について、さらに学校での事故対応（救急処置）についても学習しています。養護教諭をめざす学生たちは、子どもの心に寄り添いたいという気持ちを強く持っています。こころに寄り添うためには、子どものからだをじゅうぶんに理解することが必要です。しかしながら、疾病や障がいについて学びを深められる養護教諭の専門科目が少ないのが現状です。

そこで、授業外学修として多くの調べものをしなければならないような形を取り入れています。具体的には、新聞や雑誌、TV等から健康問題の情報を収集し、図書館の書籍等を使用してその情報を各自でまとめてもらっています。全ての内容をディスカッションする時間はないので、学生がまとめた内容を事前に確認し、情報提供にふさわしい内容のレポートを抽出します。学生たちは積極的に授業に参加していますので、自分がぜひ発表したいという気持ちがあり、今年度は一人3 本程度レポートを提出しています。しかしながら全員が発表できるわけではありません。

本時では、全ての学生が調べていた食物アレルギーをとりあげました。全員の意見が反映されるように３グループに分けました。グループ内でディスカッションを行い、その要点を各グループ 5 分で発表するように指示しました。要点を模造紙に書く等の作業もあり、ディスカッションの時間は 30 分程度としました。

研究授業ということもあり、学生たちは大変楽しそうな様子でグループワークをしていました。ある学生は、自分なりに時間をかけて調べてきたが、他の人が調べてきた内容が優れていることに気づけ、次はもっと頑張ろうと思ったと述べていました。ざわめきが気になる学生がいるとグループワークは苦痛な授業のようにも思えますが、養護教諭は、保健室で多くの児童生徒の訴えを聞きながら適切に対応していくことが必要です。その資質向上にも役立つのではないかと考えています。

研究授業にご出席くださった先生方には、授業に大変貴重なご意見をいただきました。感謝しております。今後の授業展開に生かしていきたいです。

ニュース「ＦＤ＋」の発行が遅くなりまして、大変申し訳ございませんでした。（事務局）